

## あとがき

「私たちが幽霊物語を好むのは、それが怖い思いをする楽しさへの人間の不可思議な願望と大いに関係しているからだ」——モダニズム文学の旗手ヴァージニア・ウルフは、「小説の超自然的要素」(“The Supernatural in Fiction,” 1918)の中でそう述べている。この場合の恐怖と快楽のように、私たちは同一の対象に相反する感情を抱くことがある。現在のハイドパークの北東の角付近にあったタイバーン村で十二世紀末に始まったイギリスの公開処刑は、その残酷非道さにもかかわらず、ヴェイクトリア朝も中頃の一八六八年まで七〇〇年近く廃止されなかった。その理由もまた同じような両面感情アンビヴァレンスによつて説明できるだろう。タイバーンの絞首刑場——一七八三年からはニューゲート監獄前——での公開処刑はいつもお祭り騒ぎと化し、十八世紀初頭に脱獄を繰り返した有名な泥棒ジャック・シェパードの処刑日には、当時のロンドンの人口の三分の一(二〇万人)以上が集まったという。こうした大衆娯楽が、怖いもの見たださに集まった見物人に、対岸の火事としての安心感を与えていたことは間違いない。

幽霊物語とは、そもそも、自分には累が及ばないという安心感があつても、ひよつとすると及ぶかもしれないと想像することから生まれる、そうした恐怖を楽しむための娯楽である。とはいえ、そういった恐怖の快楽を求める気持ちは決してイギリス人特有のものではない。幽霊

という超自然的現象の根源には、古今東西、靈魂の存在を信じ、死者に対して恐怖を抱くという人類共通の心性が見られるが、そのような幽霊の話を自分とは関係ないものとして楽しむ態度も万国共通のものである。幽霊が出るという噂の屋敷には二の足を踏んでも、娯楽施設としてのお化け屋敷に興味を引かれる日本人は昔も今も多いのではないだろうか。

しかしながら、イギリス人は他のどの国民にもまして伝統的に幽霊が好きな国民のように思える。この国では各地に伝わる幽霊譚や幽霊の名所を紹介した案内書や参考書は汗牛充棟もただならない。定評のある手引き書としては、一九六二年から三〇年以上にわたって英国の「幽霊クラブ」の会長を務め、九二年に「幽霊クラブ協会」を設立して終身会長となった「ゴースト・ハンター王」、ピーター・アンダーウッドによる『英国幽霊案内』(A Gazetteer of British Ghosts, 1971)と『ロンドンの幽霊』(Haunted London, 1973)がある。前者は英国全土の代表的な幽霊の名所、二二三箇所をアルファベット順に紹介したガイドブックで、二〇一〇年にメディアファクトリー社から日本語の翻訳が出ている。後者は伝説と化したものから現代のものまで地区別に紹介しているが、ヘンリー八世から不貞の濡れ衣を着せられて斬首刑を受けたアン・ブリーンの幽霊が出るロンドン塔、一七六二年にレディー・ケントなる人物の「コック・レーンの幽霊」が現れた——実際には悪戯だった——公開処刑の実施場所として有名なスミスフィールド、ナイフで殺害されて一八四八年に骸骨が見つかった「灰色の男」の幽霊が現れるドルリー・レーンの王立劇場、一八八八年に五人の売春婦を殺害した「切り裂きジャック」の

犯行現場などが特に読者の目を引く。

イギリス人の幽霊への思い入れには、世代を超えて継承される懐古趣味や郷土愛のようなものが見られる。幽霊が出ると言われる屋敷は、日本では敬遠されるものの、英国では通常より高値で取り引きされるそうである。その理由としては、幽霊の存在でさえ伝統として重んじてしまう保守的な国民性と、それとは逆に一切の因襲的偏見を打破し、無知の状態から自分を解放するという十七世紀後半以降に発展した自然科学的な考え方が挙げられるだろう。理性による思考の普遍性を主張する啓蒙思想がヨーロッパで主流となったのは十八世紀だが、それは幽霊にとって形勢が不利になった時代である。この啓蒙思想は、のちに宗教と科学の分離を促すことになり、幽霊のような超自然的現象を怖がることなく、科学的に調べようとする態度と密接に関わるようになる。

しかし、理性偏重の啓蒙主義がもたらす息苦しさへの反動として、ゴシック建築——ゴシッククという言葉はもともと「野蛮・未開」の意——の廃墟が有する怪奇・恐怖・陰惨といった中世的な雰囲気への憧憬の念が、イギリス人の心には生じていた。具体的には、十八世紀中葉にホレス・ウォルポール（英国の初代首相ロバート・ウォルポールの息子）が中世趣味にあふれるゴシック様式で改築させたロンドン近郊ストロベリー・ヒルの屋敷の人氣に触発され、豪壮な屋敷にグロテスクな怪物をかたどった彫刻や異教世界に見られる要素を数多く取り入れた中世のゴシック建築が流行し、十九世紀半ばには「ゴシック・リヴァイバル」として最盛期を迎

えることになる。ホレス・ウォルポールはストロベリー・ヒルで白昼夢に耽っている時の発想をもとに『オトラント城奇譚』(*The Castle of Otranto*, 1764)を執筆したが、この作品は中世の古城などを舞台にして起こる猟奇的事件や超自然的現象によって読者の恐怖心や好奇心に訴える、いわゆる「ゴシック小説」の元祖となり、アン・ラドクリフの『ユードルフオの怪奇』(*The Mysteries of Udolpho*, 1794)やマシュー・グレゴリー・ルイスの『修道僧』(*The Monk*, 1796)などとともに後世の作家たちに大きな影響を与えた。とはいえ、一九八六年のオックスフォード版『英国幽霊物語』の序文で編者のマイケル・コックスとロバート・ギルバートが指摘しているように、ウォルポールの『オトラント城奇譚』でも、幽霊は貴婦人にシヨックを与えるとか、悪漢に懲罰を与えるといった二次的な役割しか果たしておらず、本来の意味での幽霊物語が多くの作家によって書かれ始めるのは十九世紀後半になってからである。

\* \* \* \* \*

このように十九世紀後半に全盛期を迎えるイギリスの幽霊物語であるが、実は摂政時代の一八二〇年代に、ゴシック小説から多くのものを受け継いだ歴史作家ウォルター・スコットが、古城や僧院や墓場を背景にして自分の小説に幽霊を登場させていた。スコットの「タペストリーをかけた部屋」(*The Tapestry Chamber*, 1828)は、のちに短篇の形で興隆を極めること

になる幽霊物語の先駆的な作品である。そしてヴィクトリア朝になると、本書でも取り上げたアイルランド人のシエリダン・レ・ファニユが『ダブリン・ユニヴァーシティ・マガジン』に「幽霊の接骨師」(“The Ghost and the Bone-Setter,” 1838)を寄稿してから本格的に幽霊物語を書き始め、このジャンルにおける中心的な作家となった。

ヴィクトリア朝初期の幽霊物語として忘れてならないのは、ディケンズが一八四三年のクリスマス直前に発表した『クリスマス・キャロル』である。この中篇小説はおそらく世界で一番有名な幽霊物語であり、日本では二十世紀になってから少なくとも七〇人以上によって翻訳されている。ディケンズは、一八五〇年代になると自分が編集者を務める週刊雑誌『ハウスホルド・ワーズ』とその後継誌『オール・ザ・イヤーズ・ラウンド』のクリスマス特集号に、様々な作家の幽霊物語を掲載するようになった。『テンプル・バー』や『ベルグレイヴィア』といった定期刊行物も真似をして、幽霊物語のためにクリスマス・シーズンには臨時特集号を出すようになった。それが十九世紀後半における幽霊物語に対する一般大衆の要望を満たすようになる。

ところで、ディケンズが『クリスマス・キャロル』を執筆した(「飢餓の四〇年代」は、産業革命とともに発達した新しい科学技術にもかかわらず、多くの人々が伝染病や栄養失調、仕事の事故などで命を落としていた時代であり、それが人々に死の強迫観念を植え付けていた。ラマルク以降の進化論によって科学的思考が宗教や信仰を凌駕しつつあったことは事実だが、科学は依然として死神に歯が立たなかった。その結果、誰もが死について不安や恐怖を抱き、

死後の世界にも魂が存続することを確認できる方法を求めていた。大切な肉親を失った者たちに、あの世の死者と交信したい気持ちがあったことは想像にかたくない。そうした気持ちに乘じて流行したのが、死者の魂とは霊媒師を通じて交信できるという考え、すなわち心霊主義 (spiritualism) である。心霊主義は、一八四八年三月末にニューヨークのフォックス姉妹が、家の中の原因不明の音や出来事を引き起こすポルターガイスト(ドイツ語で「騒がしい霊」の意)現象によって一大センセーションを巻き起こしたことで、奴隷制度の反対や女性の権利拡張に熱心だったクエーカー教徒を通して広まり、その直後にアメリカでは霊界に対する関心が急激に高まった。本書所収の「窓をたたく音」の時代背景は、作者マロックが語っているように、「例のテーブル動かしが流行した初期の頃——死んだ祖先を食卓に呼び戻すという考えや、帽子をひよいと動かしたり、皿をぐるぐる回したりすることで、天上界の不思議なことが分かるという考えが、若者に嘲笑される一方で、老人にショックを与えていた頃」である。イギリスでも、アメリカの霊媒師マライア・B・ヘイドンが訪英して心霊現象を見せたことで多くの信者を獲得し、空想的社会主義者ロバート・オウエンを心霊主義者に転向させたほどである。

幽霊物語の黄金期と言われる十九世紀後半において、本書にも入れたエリザベス・ギヤスケル、アミリア・エドワーズ、メアリ・ブラッドン、イーデイズ・ネスビットといった中産階級の女性作家たちが表舞台に出てきたこと、そしてヴィクトリア朝の定期刊行物に掲載された幽霊物語の七割近くが女性作家によるものだったことは、注目に値する。性別役割分担が固定

化され、女性の活動が家庭という私的領域に限定され、性がタブー視された近代資本主義下の中産階級において、彼女たちは政治的・経済的な意味で社会の周辺に置かれていたので、周縁化された不可視なもの、抑圧された様々な欲望、憎しみや恨みといった自らの内なる悪について、何らかの形で表現したい気持ちになっていたとしても当然であろう。その主たる表現手段として着目されたのが幽霊物語であったことは言うまでもない。

女性であれ、男性であれ、欲望を抑圧された自分の分身が、本人だけに見える形で幽霊として現れるというのは、精神分析学で好まれる解釈である。幽霊の夢は無意識に抑圧された体験や出来事の象徴に他ならない。例えば、『クリスマス・キャロル』の主人公である守銭奴のスクルージは、七年前に死んだ共同経営者マーレイの幽霊によって過去・現在・未来の亡霊の訪問を予告される。しかし、子供時代のスクルージが善良な普通の少年だったことを考えると、ヴィクトリア朝の人間関係の基盤としてディケンズの師カーライルが指摘した金銭的結び付きキヤッシュ・ネクサスにしか関心を示さなくなっていたスクルージが、その過程で無意識の世界に抑圧してしまった（イエスの教えを守る）善の分身をクリスマスの時期に呼び起こされ、自分で自分を改心させるために視覚化した超自然的現象——言い換えれば、意識上の悪の行為に対する意識下の良心が可視的に外在化したもの——として幽霊を捉えることができるだろう。

\* \* \* \* \*

英国の幽霊も日本の幽霊も、この世に現れる理由は同じで、非業の死を遂げたか、未練を残して死んだために黄泉よみの国で安住できず、うらめしい気持ちで現世に登場するようである。英国の幽霊は、透明・半透明の姿や「牧師の告白」に見られる霽もやのような姿から、生前のままの姿や「殺人裁判」の亡霊のように殺された時のリアルな姿に至るまで、いろいろな形をしている。また、幽霊が現れる際には、大きな音や不気味な音、足音や何かをたたくような音を伴うことが多い。日本の場合、江戸時代の庶民の間で人気を博した「四谷怪談」、「番町皿屋敷」、「牡丹燈籠」といった幽霊伝説を通して、雨の日に乱れ髪で両手を前に垂らした足のない女の幽霊が、特定の人の所に生前の姿のまま現れるという大まかなイメージが確立している。

この世に幽霊が現れる時刻は、日本の場合には「逢魔時」と言われる夕暮れの薄暗い時か、草木も眠る丑三つ時（午前二時頃）だが、英国の場合には午前零時から一時のあたりが多く、「オンジエ通りの怪」で引用された桂冠詩人口バード・サウジの言葉にあるように、幽霊にとっては夜明けを告げる雄鶏の鳴き声が死後の世界へ戻る門限とされている。

季節はどうだろうか。日本では幽霊や怪談は夏の暑い時期を想起させるが、そこにはお盆に先祖の霊が来世から帰ってきて子孫と一緒に過ごし、また戻っていくという伝統的な信仰だけでなく、恐怖による冷汗で体温を下げて涼むという意味合いもあるのだろう。一方、イギリスで幽霊や幽霊物語を連想させる季節はクリスマスである。この国には家族や親戚の者たちがクリスマス・イヴに大きな薪まき（yule log）を入れた暖炉の前に集まり、幽霊物語の朗読を楽しむ



むという伝統が昔からあった。しかし、幽霊物語とクリスマスの結び付きが強くなったのは、『クリスマス・キャロル』の著者デイケンズが、自分の雑誌のクリスマス特集号に毎年、自己と他の作家の幽霊物語を掲載したことで、この伝統が完全に定着したからだと言われている。

\* \* \* \* \*

最近のある調査によれば、神の存在を信じている者は二人に一人だが、幽霊の存在については三人に二人だそうである。幽霊を見たことがあると答えた人も一二%ほどいる。理性を重んじる主知主義の秩序や調和に対する反動として、粗野で荒々しい感情を喚起する幽霊や奇怪なもの、あるいはそれと連動する異常心理への関心は、ヴィクトリア朝の人々のみならず、現代人の心の中でも消えずに残っているのではあるまいか。ただし、英国人の場合は、由緒正しい伝統的な幽霊にこだわりがあるようだ。テレビやラジオでドラマ化され、一九八七年に始まった舞台劇が今なお長期公演中のスーザン・ヒルによる『黒衣の女』(*The Woman in Black*, 1983)などは、その流れを汲むゴシック・ホラーの好例である。『ハリー・ポッター』シリーズのダニエル・ラドクリフ主演で二〇一二年に公開された(十九世紀末の田舎町を舞台とする)同作品のイギリス映画『ウーマン・イン・ブラック——亡霊の館』は、血みどろのスプラッター描写や猟奇的な場面を強調するハリウッド製のホラー映画とは明らかに一線を画している。

前述のコックスとギルバートは、「幽霊が必ず現れることは最初から分かっているが、その出現は突然ではなく、クライマックスに達した時でなければならぬ」と述べ、「ぞつとするほどの過剰な流血や退廃によってではなく、謎めいた悪の力を暗示するような名状しがたい雰囲気によって、幽霊の恐ろしさを読者に印象づける」ものを最高の幽霊物語としている。確かに本書の八篇とも幽霊は出てくるが、最初から出るもの、途中から出るもの、間欠的に出るもの、そして「鉄道員の復讐」や「牧師の告白」のように最後に出るものと、その登場の仕方様々である。また、作品全体が幽霊一色であれば、読者は嫌気がさすかもしれないが、ほとんどの物語は恋愛のプロットを並行させているので、とても親しみやすいものになっている。

本書は、私が勤務する大学で教養英語のテキストとして使用した二八篇から、恐怖と緊張で一気に読ませるような面白い八篇を選んで訳したものである。その選択には訳者の独断と偏見が見られるかもしれないが、その点は御容赦いただくとして、これら二八篇の英語の原典を電子化したウェブサイト（検索語は Victorian Ghost Stories）が開設されているので、こちらにも読者諸氏に御利用いただければ幸いである。

二〇一三年早春 名古屋

松岡光治